

杉並ユネスコ協会主催：ユネスコギャラリーツアー

ツアー先：財団法人 中近東文化センター

平成14年11月3日

テーマ：

『イスラームのガラス、ガラスに見るイスラームの生活と美 エジプトでガラスを掘る』

講師：真道 洋子研究員

1. はじめに

これからエジプトのイスラーム・ガラスの歴史について、また、それに関連した話を少しいたします。皆さんはエジプトというと古代エジプトのピラミッド、ツタンカーメンのような華やかな古代文明を思い起こされると思いますが、現在のエジプトはイスラームの人々が大多数を占めるイスラーム国家です。

エジプトは非常に長い歴史がありますが、通常歴史が指します古代王朝時代とガラス文化が指します古代という時代とは異なりまして、ガラス文化では、紀元前1500年頃の第18王朝と呼ばれる時代からクレオパトラの死すなわち、プトレマイオス朝の終わりまでを指します。この頃エジプトではコアガラス、モザイクガラスと呼ばれる、今のガラスとは異なったガラス器が作られておりました。

次にローマ支配時代、ローマ帝国がエジプトを支配するようになりますと、エジプトもいろいろと変わっていきました。それと同時に紀元前一世紀に、ガラスも吹いて膨らませて作る吹きガラスの技法が発明されてガラス器の形も一変し、ガラス器がローマ帝国の支配地にあわせて出土するようになります。

そして次の時代が、今日のお話の中心となりますイスラーム時代です。イスラーム時代の歴史の始まりは、紀元622年、これはイスラーム教を開きました預言者のムハンマド(マホマッド)がメッカからメディナに遷都した年で、これがイスラーム元年となっております。それから後、イスラーム教は中近東地域を中心に広大な範囲に広がっていきます。

このイスラーム時代の大きな特色は、連綿と続いてきた文明、ローマ文明、キリスト文明などの古代文明の技術を吸収し取り入れ、それを自分流にアレンジいたしまして、それを後世につなげていったことにあります。そして15世紀、ヨーロッパのイタリアを中心に興った古代を修正し新しい時代につなげていくルネッサンス(文芸復興運動)に大きな影響を与えます。

その一方で、オスマン帝国と呼ばれるトルコ系の王朝が成立いたしますと、イスラーム圏の大部分を征服しましたオスマン帝国は、これからご説明します中世イスラーム時代とは少し異なります。トルコ系の民族が支配したオスマン帝国はそれまでのイスラーム王朝とは異なりまして、それ以前の文明を吸収しつつも武力で征服した王朝でありました。現在、国際社会の中で過激派が活動しておりますのでイスラームと聞くと、戦闘的なイメージをお持ちの方が多いと思います。けれども7世紀の初め、イスラーム教が拡大し地域を征服していくなかで

とった行動は、改宗(イスラム教に入信)もしくは武力というような二者択一ではなく、もう一つの選択肢が存在しました。すなわち改宗、納税、さもなければ力で征服するという三者択一でした。ですから、多くのキリスト教徒などイスラム征服以前にその土地に住んでいた人達も税金を払えば今の生活を保障されました。そしてその税金の割合も、以前イスラムの土地を支配していたキリスト教より低い割合でした。それがイスラムの勢力範囲が一気に広がった背景であり、決して武力だけによるものでなかったのです。この辺が幾分日本人に誤解されているかもしれませんが、イスラムは、様々な物を取り入れて非常に実利的なそして許容範囲の広い考えです。

2. エジプトにおけるガラスの歴史

さて、これからイスラムのガラスの説明に入る前に、まずはそれまでのガラスの歴史を簡単に説明します。

エジプトでガラスが登場しますのは、紀元前16世紀です。それ以前はファイアンスという、ガラスの主原料の珪砂を練り固めて作っておりました。ファイアンスは土器とは違い、自然に釉薬(うわぐすり)がかかったものもあります。ファイアンスの例として、カバの像があります。古代エジプトでは、カバは外見からして非常に大きく多産のイメージがあり、その一方でナイル川に生息している動物の中で一番凶暴な動物でした。ファラオがカバ狩りを行うシーンも壁画に描かれています。ファイアンスは表面が青く焼きあがることから、それがナイル川の青にイメージできるので、カバの焼き物の身体には水生色、川にちなんだような柄が描かれております。これがエジプトにガラス容器が登場する前にガラスの親戚のようなものとして存在したファイアンスという物質の例です。

ファイアンスが作られた後に作られるガラスはコアガラスと言います。紀元前16世紀にトトメス 世というファラオがメソポタミアと外交を持つと、それによりメソポタミアで発達しておりましたガラス製造技術がエジプトに伝えられました。しかし、この時代のガラスは一見焼き物のようで現在のように透明ではありません。この時代のガラスは、まず芯となる粘土を作りその周りに溶けたガラスを巻きつけます。そしてそれを冷やしますと周りのガラスが固まります。そして固まった後、芯になっていた粘土を掻き出します。そうしますと芯がとれますので中が空洞になり容器ができるわけです。そういった特殊な技法でこの時代のガラスは作られておりました。現在のガラス製造技法とは全く異なっておりました。この時代ガラスは色鮮やかなものが多く、王侯、貴族といった上流階級のもので、実際、王様のお墓、宮殿から多く出土しております。それからしばらくの間はガラス製品が作られるのですがどうもエジプト人はガラス製品よりもファイアンス製品の方が好みだったらしく、エジプトではガラス文化はしばらくの間衰退してしまいます。

紀元前1世紀になると、東地中海のシリア、パレスティナ地域を中心とした地域で同じ様な技法を使いながらもギリシア陶器をまねたようなガラスが作ら

れますが、これらはあまりエジプトには入ってきませんでした。

エジプトでは、プトレマイオス朝時代、特殊なガラスが興盛します。アレキサンダー大王が大帝国を作り若くして亡くなった後、4人の将軍がこの大帝国を引き継ぐのですが、その中でエジプトの統治を任されたのがプトレマイオスで、エジプトにプトレマイオス朝が成立します。これによって、エジプトはマケドニア人(ギリシア系)に支配されることになり、アレキサンダー大王にちなんだアレクサンドリアという新しい首都も建設されました。ここが古代ヘレニズム文化、ギリシア文化が融合した新しい文化、ヘレニズム文化の中心地になりました。ガラスに関しても、この首都を中心にモザイク・ガラスが製作されるようになりました。

これは、色ガラスの棒を、断面に模様のできるように束ね、これをカットして、人面など複雑で多彩な文様をつくるもので、いわゆる金太郎飴と同じ原理です。そして、こうした高度な技術を用いている中で、初めてガラスの持っている性質に気付くこととなります。その性質とは、ガラスは膨張する、膨らむということです。それまでのガラスは焼き物と同じように練り固めるようなことでしか成形されていなかったのですが、ガラスの棒などで細工していくうちにガラスは実は膨張するということに気付き、これによりこれまでのガラスとは形が一変しました。それから膨張を利用したガラスが沢山作られていきます。初めは理科の実験のような簡単な物でしたが次第に器材が発達していくと大型の物も作られるようになりました。そしてその発見により、それまでの色とりどりのガラスから無色透明を目指したガラスが多く作られていくことになりました。

そして次のローマ時代に入ります。初期にはエジプトのデザインを引き継いだような色鮮やかなガラスも発見されますが、一般のローマ・ガラス(ローマ時代なのでローマ・ガラスと呼びます)を紹介します。エジプトのカラニス遺跡というエジプトのローマ・ガラスを語る上で重要な遺跡があり、その遺跡の重要な物の中にファイユーム肖像画があります。この地域には、生前に自分の似顔絵を描いて準備しておいた物を死者の顔の部分にかぶせる習慣がありまして、そういった肖像画の中に、手に容器を持っているものがあります。その持っている容器をみますと、上の方は白く下のほうは黒くなっています、それはおそらくワインの注がれた透明なコップだと考えられます。実際どんなガラスかといえますと、ビンの形だったりコップの形だったりあらゆる形が存在しました。それは、ガラスを吹いたらどんな形の物ができるのだろうといろいろと試行錯誤された時代だったわけです。ですから現在のガラスの形もローマ時代に完成したといってもなんらおかしくないということです。

しかし、どうしてこんな昔のガラスが割れずに残っているのでしょうか。この当時ガラス容器自体がとても高価な物であったため、木箱などに入れて大事に保管されていたり、又シリアの地域ではお墓に埋葬されていたりしました。ですから、ローマ・ガラスは完全な形のまま発見されることが多いのです。そして日本の美術館で見られますローマ・ガラスの多くはシリア、パレスティナ

地域から入ってきたもので、エジプトのローマ・ガラスが入ってくることはあまりありません。エジプトのローマ・ガラスは楕円形の独特の形をしていまして、私達は初めそれはエジプトのガラス職人が未熟だったためこんなゆがんだ形になったと考えましたが、実はこれはエジプトの独特の技法で楕円形にしていたようです。

次に、イスラーム時代のガラスについてお話したいと思います。イスラーム時代と言いましても中世イスラーム時代、7世紀から14世紀頃までを中心にお話します。

イスラーム世界はこの当時、中近東地域だけでなく西はスペインのイベリア半島から東はパキスタンまでイスラームの勢力は広がっています。しかし、通常イスラーム・ガラスと呼ばれるのは中近東で作られ使われた製品が中心です。そして、ガラスが高級品から日常品になり一般の人も使うようになり、イスラーム・ガラスはローマ・ガラスよりも数多く残っています。美術館などに収納されておりますガラス器の多くは、どこから出土したのかわからない物が多いのですが、発掘調査で発見された遺物は、時代、出土地がはっきりしています。それだけでなく、良い物だけでなく、全てのガラスを見ることができるので、科学的な研究をする上で発掘調査はとても重要な手段です。

3．イスラーム時代の遺跡の発掘

日本では、1978年からエジプトでイスラームの遺跡の発掘調査が始まりました。スタートは、早稲田大学が1978年にエジプトのフスタートという所で行った発掘調査です。このフスタートという地域は、イスラム教がエジプトを支配した時、古い風習の残るアレクサンドリアより新しいイスラム都市を作ろうということでフスタートに首都が建設され、エジプトの初めてのイスラム都市として大きく発展していきました。そしてファーティマ朝という王朝の時、カイロに新しい首都ができますが、フスタートはカイロと並び大きな都市となりナイル川の分岐する要の位置に大きく発展していき、この二つの都市は当時の世界で有数な大都市となり、対抗できるのは中国の長安ぐらいでした。しかし14世紀にペストがフスタートに大流行して、ここに住んでいた人達の多くが死に絶えてしまい、生き残った人達も違う所に移住してしまっって廃墟になってしまいました。考古学的には、廃墟になった14世紀そのままの物が残っている、とても貴重な遺跡ですので、1911年からエジプト、1963年からアメリカなどが発掘調査を始め、日本も1978年に、早稲田大学が調査を開設しました。そして1981年からは、以前より早稲田大学と関係のあった出光美術館も参加いたします。そして我々中近東文化センターはその当時早稲田大学で発掘主任をなされていた川床睦夫先生、現在は中近東文化センターの主任研究員でいらっしますが、その方を中心として調査を引継ぎました。そしてその後フスタートだけでなく、シナイ半島の港の方も調査しようということになり、1985年イスラエルからエジプトに返還されたトゥールという港町を、1988年にはトゥールから8キロメートル離れたラーヤという港町を調査することになりました。

このツールとラーヤは距離的に大変近くにあるのですが、時代はまったく異なりまして、初めラーヤが港町として栄えていたのですが、何らかの理由で衰退し、港がツールに移ります。広い見方をしますと同じ町だったと言えます。したがって、我々はこのフスタート、ツール、ラーヤといった三つの重要な遺跡都市を発掘調査しております。

1978年、フスタートで初めて発掘調査を始めた年に、いきなり素晴らしいガラスの瓶が出土しました。この当時ガラス器はほとんど出土せず、出ても破片ぐらいでしたが、このガラス瓶は奇跡的に井戸の中から少し欠けただけの非常にすばらしい状態で発見されました。このガラスは非常に薄手で美術的にもとても素晴らしい物でした。この当時、外国調査隊の資料の中で上級品はカイロの博物館に収めるのが決まりでした。しかし日本調査隊が初めてイスラーム時代の遺跡の発掘調査を始めた年にこんな素晴らしい物が発掘されたということで、エジプト政府はこれを日本に寄贈してくださいました。ですから本来はカイロにありますイスラーム芸術博物館に展示され、その中でも特別な場所で展示されてもおかしくない物なのですが、これはエジプトと日本の友好の証として日本で皆さんに見ていただけたというわけです。

その後エジプトは法律が変わりまして、1983年以降、発掘した物は一切国外持ち出し禁止になり、もうエジプトの発掘品が日本に入ってくることはありません。ですから、そういった意味でもこれは貴重な資料となっております。

このほかにもガラス器だけでなく、ガラスの原料なども発見しております。ガラスは砂漠の珪砂(シリカ分の多い砂)に植物の灰を混ぜ合わせてから一度溶かし、ガラスという物質を作ります。それから初めてそのガラスを使い容器(製品)が作られます。すなわち、ガラス器を作るということは、ガラスの物質を作る、ガラス器を製造する、この2段階の工程が存在します。そのときの過程を示すガラスの第一状態の原料(珪砂、植物灰)、それからそれを混ぜ合わせた物、また、そしてそれを溶かした痕跡、このような遺物が出てくると、この場所でガラスが作られていたという証拠になります。

考古学の面からこのガラスをどのように研究いたしますかということ、例えば、一言で緑と言いましても様々なバリエーションがありますし、色をどう表現するか皆さんもまちまちだと思います。そこで、まず、そのような表現する色を決めたり、様々な技法、地域、年代からの容器の見分け、識別などをします。そのほかにも、先ほどお話をさせていただいたローマ・ガラスなどはほとんど装飾と呼べる物はありませんでしたが、イスラーム・ガラスの特徴として、装飾ガラスが発達していましたので、この分類、それから科学的分析なども考えます。

4 . シナイ半島の歴史と発掘調査

今現在、私たちが一番力を入れ、中心的に発掘をしているのはシナイ半島の発掘調査です。そこで、ここで少し、シナイ半島の歴史についてお話ししましょう。

シナイ半島には、中央に聖カタリーナ修道院があり、この聖カタリーナ修道院の背後にはシナイ山という山がそびえています。このシナイ山は、ご存知の方もおられると思いますが、ユダヤ教に出てきますモーゼが十戒を受けたといわれている所です。エジプトからモーゼが脱出する時、このシナイ半島に渡って助かったと言われております。したがって、シナイ山は、ユダヤ教徒にとっての聖地であると同時に、キリスト教徒にとってもシナイ山の麓に修道院がありますのでここは重要な土地でありました。

この聖カタリーナ修道院は、ローマ時代、アレクサンドリアの才色兼備の女性カタリーナの名にちなんでおります。カタリーナは、時の皇帝に好意を抱かれ求愛を受けます。しかし彼女は「私は神に仕える者なので結婚はできません」といって断ってしまいます。それに怒った皇帝が彼女を殺そうとして、荷車の車輪にはりつけにしますが、神のご加護で車輪が外れて彼女は助かります。さらに怒った皇帝はナタで彼女の首を切ってしまいます。しかし彼女の首からは赤い血ではなく白い牛乳のような血が流れ、どこからともなく天使が現れ彼女の死体を持ち去ったという伝説があります。それが14世紀にシナイ山の麓から彼女の遺体が見つかったということが伝わりまして、ここにあった修道院が聖カタリーナ修道院と呼ばれるようになりました。

モーゼの伝説の残るシナイ山はユダヤ教の聖地であり、聖カタリーナ修道院はキリスト教の聖地であるこの土地は沢山の巡礼者が訪れます。この山の険しい巡礼所にはいくつかのアクセス方法がありましたが、そのルートのひとつとしてトゥールとラーヤの港町を使ったルートがありました。これは、聖カタリーナ修道院で巡礼をした後、東に抜けて、聖地エルサレムへ向かうルートがあり、そうしたことがトゥールとラーヤが栄える一つの要因でした。

また、これらの港は、イスラム教の信者がメッカへ巡礼を終えた後、立ち寄る中継地であったり、エジプトの豊富な農作物をメッカに輸入する時などにもここが使われておりました。そういった意味でこの二つの都市はとても重要な都市でありました。また、考古学的にも重要な遺跡です。

フスタートは貴重品が数多く集まっておりましたが、大都市であったため14世紀以降廃墟になったとは言え、多くの貴重品が盗まれました。しかし、砂漠にある港町は使われなくなると人が入ってくることはありませんので非常に良い状態で残っております。そしてこの二つの遺跡からも沢山のガラスが出土しました。

トゥール遺跡から出土した細長い瓶ですが、これは通称“聖水瓶”と呼ばれ、15世紀から17世紀頃のもので、シナイ半島には数多くの巡礼者が訪れ、特にキリスト教徒が数多く訪れます。彼らは修道院の水を持って帰る風習がありまして、この瓶は、それに使っていたのではないかと考えています。この細長い瓶を見ますと、どうやってこれに水を入れたんだと思うような直径1ミリか2ミリの穴しか空いておらず、これは逆に非常に水がこぼれにくい構造になっています。これは、貴重な聖水の移動・保存に適していたと考えております。

それともう一つ、これは私の仮説ですが、これが港から大量に出土したという事実は、港に聖水売りの商人がいたことを示しているのではないかと考えています。実際に同じ形をした瓶が、ギリシャの北部にある遺跡の教会から出土しており、トゥール、ラーヤの聖水売りから買った瓶を、信者の方がその場所でも使ったということもあるのではないのでしょうか。

トゥール遺跡の14～15世紀の層からスティックと並んで出土した、この化粧用の小瓶には黒い粉が残っていました。これを分析しましたら硫化鉛という鉛成分でありました。これは、古代エジプトの壁画にも描かれていますが、中近東の人は目の周りを黒く縁取る風習があり、そのために使うコホルと呼んでいる顔料です。鉛を目の周りにつけたらいかにも身体に悪く、本当に化粧品なのかと思われるかもしれませんが、日本でも江戸時代、鉛白が化粧に使われておりましたし、他の地域から出る化粧品の原料も、ほとんど似たような成分でありますので、化粧品でまちがいないと思います。

これは考古学的な資料とて貴重な物です。考古学では何に使ったかということが一番知りたくて分からないテーマですが、このように内容物が残っておりますと何に使ったかが分かります。そうしますと他の、このような形をしています容器も同じような使い方をしたのが分かるということで、非常に重要な資料になります。

次に、ラーヤ遺跡の出土品を紹介しましょう。ここは1キロメートルほど広がっている大きな遺跡で、一番小高い丘の上に城塞が発見されました。この城塞の形はイスラーム以前のビザンツ様式の城塞ですけれども、この城塞の中から、イスラーム教のモスクの遺構が発見されました。たぶんこのモスクは9世紀頃、建設されたと考えられますが、これは非常に大きな発見でした。イスラームが始まりますのは7世紀ですから、それからほんの200年後に作られた数少ないイスラーム時代初期のモスクであるということになります。そして先ほどお話したように、このシナイ半島は、聖カテリーナ修道院を中心とする非常にキリスト教が色濃く繁栄している地域ですから、その中にイスラーム教がいつの時代に入ってきたのかを考えるのにとっても大きな歴史的な資料となります。

エジプトといいますがどうしても古代、ピラミッドの時代が思い起こされますが、今現在エジプトに住んでいる人達のルーツはイスラーム教がスタートになっていますので、このモスクの発見は彼らのルーツにかかわります大きな発見になったわけです。ですから発見されたときはエジプトでも大きく取り上げられました。

ここからは非常に豊富なガラス器が発見されました。いくつか例をあげて説明しますと、まずお皿の形のガラスなどの縁の中を先の尖った固い道具で引っかき傷のように文様を削った皿があります。これは9世紀から10世紀の代表的な装飾ですが、これと同じような装飾ガラス皿が他の地域からも発見されました。それは、中国の法門寺というお寺です。この法門寺は、唐の王朝と密接な関係を持つ由緒正しいお寺であります。このお寺にイスラームのガラスが納められている、そして、このシナイ半島の遺跡からも同じようなものが発見され

るといことは、エジプトと中国を繋ぐ大きな架け橋になるわけです。また、類似品がイランの北部からも発見されており、この中世という時代は様々な地域にイスラム教が拡散していった時代であったことがわかります。

このほかに出土品で重要なのが、先ほどお話したコホルという顔料がはいった化粧用の瓶です。さきほどのツールの例は14世紀から15世紀の製品ですが、ラーヤで発見された製品は9世紀か10世紀の製品で容器の形もまったく違いますが、その中にやはり黒い物が残っており、分析したところ、結果は少し異なっておりました。コホルの原料が時が経ち変わったのだと考えております。

そして、なんととっても素晴らしい製品は、完全な形で出土したガラスのコップです。これは、1ミリあるかないかの非常に薄いガラスで、真ん中の部分にカット装飾があります、これは一見しますとアラビア文字に似ています。多分、文字を真似た文様であると思われます。このコップはとても綺麗な無色透明なガラスです。ガラスは珪砂、植物灰などを混ぜて作りますので中に不純物が混じり、普通に原料を溶かしてガラスを作りますと不純物が発色し緑色になります。ガラス窓でも一見すると透明のようですが、横から断面を見ますと大体緑色になっています。ですから普通に作れば緑色になってしまうガラスをどうやって綺麗な無色透明なガラスに近づけられるのかという研究がこの時代、職人達によってとても熱心になされました。そして職人達が知恵を絞り、最終的にマンガンを入れますと鉄の緑色を打ち消す効果があることがわかりました。このガラスを分析した結果、やはりマンガンの値が検出されました。私達にはただの無色透明にしか見えないガラスも裏ではそういった研究の成果がでている非常に貴重な資料になります。

次に、このコップはどこから来たのかという問題が残ります。港は海を繋ぐものですから当然船がやってきます。また、同時に陸との接点でもあります。港は海だけを見ているのではなく海と陸との交差点でもあるわけです。そういった観点から港は重要ですが、その中でこのガラスのコップがどういうルートで動いたかを調べることはガラスの研究だけでなく製品がどういうルートで動いたか、海のルートと陸のルートがどのように使われたかを考えるのにとっても大きな発見でした。

5 . 生活の中のガラス器

今回開催した中近東文化センターの展示「イスラームのガラス ガラスに見るイスラムの生活と美」のコンセプトは『生活と美』ということで、人と物がどういったように関わったのかに重点をおいて展示しております。

イスラーム・ガラスの展示と言いますと、「時代を追ってこういう風に変わっていきました」とか「これはこういう装飾技法で作られています」と説明すれば皆さんに分かってもらい易いと思います。けれども「イスラームってなんだろう」と皆さんが思っておられるのではないかと、そして、イスラームと言えば過激派が目立っておりますから、そういう偏った見方をされているのでは

ないかとも考えました。私は2001年10月にニューヨークに行ってきました。当時のニューヨークと言いますと、9月11日に同時多発テロ事件が起こっており、その直後です。メトロポリタン美術館で開催されたガラスの国際会議に参加し、研究発表を行ってきたのですが、この時はイスラームのガラス特集で、一時は中止になりそうだったのですが、開かれることになり、参加してきました。同時に「スルターンのガラス」と題した大展示会も開催されていました。

参加者は欧米の方々がほとんどですが、彼らが考え想像し接しているイスラーム人と我々東洋人、日本人が接しているイスラーム人から感じるもの、特に私達は毎年毎年、25年間エジプトに出掛けていって現地の人達と交流を深めて、その中で感じたものは今、世界で報道されている人達とはだいぶ違うなと感じました。

イスラームが征服したとき力だけで抑えたのではなく、力、改宗又は税金でという合理的な考えを持っています。それと同じように、使っている物をみますと、宗教色のあるものばかりではなく、非常におおらかで活動的な製品が数多く残っています。そういったものがどのように人と関わっていたのかと言いますと、まずイスラームの物というのは基本的に鑑賞対象ではありません。ですから見て頂いても美術的ではないと思われる方もおられるかもしれません。なぜならそれは普段日常で使われていた物だからです。ですから装飾も美術的にこだわった物はあまりイスラームにはありません。そして生活に密着した物がたくさんあるというわけです。そう考えますと、物の一つ一つに人間の繋がりが存在しています。まず、それを作った人、そしてそれを使った人、そしてそれ結びつける商人がいるわけです。最終的にはそれを使った人がおり、観賞品ではなくても洗練され美しいと感じる。

実際にイスラーム・ガラスというのは非常に装飾技術が発達しまして、それから後のヨーロッパのガラス工芸にも大きな影響を与えました。しかし実際どのように使われていたかを考えるのはとても難しいことです。先ほど話しましたように、容器に内容物が残っていることは本当に稀で、ほとんどの場合想像するしかありませんが、イスラームのガラスは大抵飲食の「飲む」用途に多く使われております。ローマ・ガラスではお皿も多く使用されましたが、イスラーム時代になりますと陶器が大変発達しますので、皿などの機能は陶器や磁器の役割になり、ガラスは液体用の容器として発達します。その他では生活に使う化粧やランプなどの照明器具で大きく発展します。

次に、これらの流通ですが、流通は基本的に地域内交流が中心ですが、近い所で動いた場合、記録に残りづらく、なかなか私達の目には見えてきません。一方、後でお話するように非常に遠くに運ばれると後追いすることができます。

次に生活との関わりについて、まず飲食の飲についてみてみましょう。サーマラーの遺跡の壁画に手に碗を持っている人物が描かれています。これは、食物を盛るのではなく水を注いでおりますのでコップとして使っていたことがわかります。実際に9世紀から10世紀には描かれている絵と同型のガラスが非

常に沢山作られております。それともう一つ背の高いコップもあります。これはシチリア島の礼拝堂の壁画にも描かれていました。この時代、シチリア島もイスラームの勢力地だったので、ここに描かれている人物はこの土地の統治者だと思えますが、その人が手に持っているコップの中には赤い液体が描かれております。この地中海域で赤い液体と言えばワインしかないと思われれます。このほかにも果物の汁から作ったジュース、これはシャーベットの言葉の語源になったシャリバという飲み物にもガラスが使われていたと考えられます。そのほか液体関係以外ではさきほどお話しました聖水瓶、化粧用小瓶があります。

また、イスラム時代に非常に発展をとげた物は照明器具です。それはガラスを透明に作れるようになったことから、特にランプがこのイスラム時代以降発展していきます。家庭内では焼き物の置きランプが多く使われたのですが、キリスト教会、イスラム寺院では天井から吊るすランプが非常に珍重されました。

次にこれらの製造と生活を結ぶ流通と交易ですが、これは9世紀から10世紀、イスラームが一番拡散していった時代ですが、当時イスラーム世界の中心であったバグダードから東は中国、西はヨーロッパまで広がっていきます。これはぜひお話ししたいことですが、私達が住む日本にも実はイスラーム・ガラスは入っています。それは奈良の唐招提寺、東大寺正倉院と福岡県にあります。9世紀から10世紀頃、福岡県の鴻臚館遺跡は、場所は元南海ホークスの平和台球場の外野席の下で、外野席を改築工事する前に発掘調査を行ったときに発見されました。このように日本や中国にもイスラーム・ガラスが数多く入ってきているんですが、どういうルートで入ってきたのかというとシルクロードが東西交易のルートとして考えられますが、実は陸のルートは非常に危険性を伴い、そして量が運べない、時間がかかるということで、むしろガラスや陶器を運ぶときは海のルートが重要でした。このルートが使われたという証拠を示すように中国で発見されたガラスと同じ装飾の破片がベトナムの中部で発見されています。

6. おわりに

最後に装飾的なガラスを形と色と光という観点でお話ししたいと思います。ガラスでしか表現できない造形を使った芸術表現、ガラスの表面に凹凸をつけることで光を屈折させる、光を使った芸術表現、それから、ガラス自体に色を付けコントラストに使った色の装飾効果、このような点に留意しながらガラスを見ていただくと面白いと思います。

イスラームが栄えた時代、ヨーロッパではまだ高度なガラス産業は十分に浸透していませんし、東の方はガラスより陶器の方がメインでありましたので、このイスラーム・ガラスは、その時代世界最高峰のガラスでした。例えばゴールド・サンドウィッチガラスというのがあります。これはガラスとガラスの間に金箔をはさんで作るのですが、十字文様のタイルがキリスト教会で発見されました。イスラム世界にも非常に沢山のキリスト教の人が住んでおります。で

すからこういった共存を示す遺物も出土するのです。またガラス職人は非常にユダヤ教の人が多かったことが知られています。現在のユダヤとイスラムといえば完全に対立関係として見られますが、それはほんの近年のことで、それ以前の、私が勉強しております中世のエジプトではユダヤ教の人達とイスラム教の人達はとても友好的で一つのガラス工房で一緒に働いていることも珍しくありませんでした。また、イスラムの発達した装飾技術にラスター彩装飾とエナメル彩装飾があります。

エナメル彩はイスラム・ガラスの最後の華で光と色と形の3つの要素を持ち合わせております。14世紀前半、その頃ちょうど十字軍運動や巡礼を通じてヨーロッパの人達がたくさん中近東地域を訪れました。そして、エナメル彩ガラスなどのイスラム・ガラスの美しさにたいそう驚きました。そして、この十字軍で訪れた人達の多くは競って国に持ち帰り、イスラムのガラスがヨーロッパに伝わっていきました。ヨーロッパの人達がイスラムを訪れる時は必ずヴェネチアを経由します。当時イスラムを繋ぐ唯一の窓口は地中海を覇権しておりましたヴェネチアでありました。現在、ヴェネチアン・ガラスで有名な都市ですが、この頃からガラス産業が大きく発展していきます。そこに大きな影響を与えたのがイスラム・ガラスでした。イスラムでエナメル彩の技法を学びヴェネチアで作る。そうした経路でランプの技法、製品などがヨーロッパに広がっていきました。ヨーロッパに入りますとエナメル彩もガラスだけでなく革に描かれるなど大きく発達していきます。

とくに、ランプはイスラムにとって非常に重要な物で、イスラムの聖典コーランの中にこう書かれております、「アッラーは天と地の光である、光は例えるならば壁のくぼみのランプである。光はガラスで包まれガラスは輝く星となる。」

「神が光である」というのは様々な宗教でみられる思想ですが、コーランの中では「この光はガラスに包まれている」という表現があるようにガラスという物自体が神聖視されていたようです。モスク・ランプはエナメル彩のなかでも非常に綺麗な物です。宗教施設で使われていたことから当然人物や動物の図柄は一切入っておりません。これらのモスク・ランプは当時の権力者が腕のいいガラス職人をお抱えにして作らせたようです。

16世紀に中近東がオスマン帝国に完全に支配されてしまいますと、エジプト、シリアなどのガラス職人、学者、宗教家、あらゆる職業の人達がオスマン帝国の首都イスタンブールに集められ、地方の産業は衰退してしまいます。ガラス製品もトルコから離れていたイランなどでは美しいガラス容器が作られますが、それ以外では衰退してしまいます。しかし、19世紀末にアール・ヌーヴォー、新しい芸術革命がおきまして、もちろんオリエンタリズムやジャポニズム、東方にある物に関心をもたれるようになりました。そういう流れの中で、このイスラム・ガラスがもう一度注目されることになりました。そしてエナメル彩の技法、これはすでにヨーロッパに伝わっていましたが、オリジナルの力強さはなく、イスラムの重厚なエナメル彩をどうにか復元できな

いかという試行錯誤が繰り返されました。そして、試行錯誤の末、エナメル彩の復元に成功し、パリ万博にも出展され、多くのアール・ヌーヴォー期のガラス作家に多大なる影響を与えました。初めはイスラームのコピーでしたが、形のルーツはヴェネチアン・ガラス、文様の部分とエナメル彩の技法の所にイスラーム・ガラスの起源が見れる製品などもが作られるようになりました。そして、イスラームのコピーからイスラーム風の作品が生み出され、この技法はエミール・ガレの作品にも採用されました。このようにアール・ヌーヴォー期のガラスに大きな影響を与えた点においてもイスラーム・ガラスは大きく貢献しているというわけです。

先程お話したように、日本にもイスラーム・ガラスは入ってきておりますし、十字軍、ヴェネチア経由でヨーロッパのガラスの技法も伝わっています。こういう新しい芸術運動の中にもイスラームの影響があり、実はあまり気付かないところにイスラームという物が入ってきており、我々が生きている世界と関わりがあるのです。これからも先ほどお話した「人と物との関わり」、直接的な関わりについて、生活であるとか、物という身近な観点から考えていきたいと思えます。

以上予定より少し長くなりましたがこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

中近東文化センターホームページ <http://www.meccj.or.jp/>

<参考文献>

「エジプトのガラス ファラオの時代からイスラームまで3000年の歴史をたどる」

中近東文化センター 2000年 真道 洋子著

「イスラームのガラス ガラスに見るイスラームの生活と美」

中近東文化センター 2002年 真道 洋子著

「イスラームの美術工芸」世界史リブレット」

山川出版社 2004年刊行予定 真道 洋子著

「エジプト・イスラーム考古学25年史 中近東文化センター イスラーム・エジプト調査隊の歩み」

中近東文化センター 2002年 イスラーム・エジプト調査委員会 川床 睦夫著